
ゲーム廃人・THE・レジェンド

刺身ハンター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲーム廃人・THE・レジェンド

【Nコード】

N8869W

【作者名】

刺身ハンター

【あらすじ】

モンスターハンターに命をかける、究極の廃人こと主人公・遠藤一樹。彼は、モンスターハンター以外の事に興味がない。そんな廃人と出会ってしまう、運命の女性…。モテない・冴えない・どうしようにもないの三拍子揃った彼が、どうやって彼女をGETするのか！？……と、いうめちゃくちゃな恋愛小説です。

注意！

この小説は、モンスターハンターがわからない人が読むと、全くの

意味不明になってしまします。ぶっちゃけ、超マニアック小説です。
更新はかなり遅めになります。

𡗗人

[illegible]

薄暗い部屋に、永遠と響く不気味な音。そいつの正体は、ゲームパッドのボタンを高速で操作する音だ。

[illegible]

「……チツ！2ラスタか。やっぱ野良は駄目だ。求人区に行かないと、効率よくクエを回せない。」

ゲームパッドを操作する人間、遠藤一樹は舌打ちをする。なぜならいつもは1分で狩れるモンスターが、今日にかぎって2分以上もかかってしまったからだ。彼のプレイしているゲームは、カ。コンのモンスター。ンターフロンティア。彼にとつて、モンスターハンターは人生そのもの。彼は、モンスターハンターに出会うまでは、あまりゲームはしなかった。だが、友人にモンスターハンターを奨められ、プレイした時、彼の人生は転機を迎えた。ゲーム廃人……いや、モンハン廃人と化した第一歩。モンスターハンターは、美しく、広大な自然の中に生息するモンスターを、プレイヤーは狩人となつてひたすら狩るゲーム。巨大なモンスターを狩る快感！殺るか殺られるかの、究極のサバイバル！そんな世界感に、彼の心は引きずり込まれた。パソコンの画面に写るハンターは、自分自身。手に持つ

ているゲームパッドは、巨大なモンスターに立ち向かう、武器そのもの。デスクを支配するかの如く配置してあるキーボードは、現実とゲームの世界をリンクする魂の防具！彼は、睡眠以外の時間はつねに、モンスターハンターの事を考える。食事は狩りによって失われた精力を回復させ、風呂は、頭の中で完全に防具のスキルポイントを網羅した天才的頭脳で、ひたすらスキルシュミを繰り返して、最高の装備を考える。トイレは、必要な素材の確認と入手方法を反復して、脳内に刻み付ける時間だ。

「……ガチ、@3ココ！……つと。」

カタカタと心地よい音を奏でるキーボード。このサウンドこそ、どんな音楽も敵わない、遠藤一樹唯一無二の癒しのミュージック。

主人公・遠藤一樹はハメや罨連、装備指定を嫌う、俗にいうガチ好きハンター。しかし、彼のスタイルは効率重視と、矛盾を抱えた破天荒な腕前を持つ、極めて稀なプレイスタイルと言えよう。彼は、決してハメや罨連が出来ない訳ではない。普通、効率を求めるならば、必然的にそこに辿り着く。しかし、彼は決してやらない。何故か？答えは簡単。

「……つまらない。」

遠藤いわく、圧倒的に巨大なモンスターと対峙する緊張感が、ハメや罨連では味わえない。一瞬の隙をつき、モンスターの攻撃を回避するスリル！一歩間違えば、即力尽きてしまう緊張感！それに、自分より遥かに巨大なモンスターを自分の腕前で挨拶せる陶酔感が、ハメや罨連では感じない。それが、装備自由ガチにこだわる遠藤の理由。それに、ガチでしか磨かれない、ハメ、罨連では決して辿り着けない、神の領域ともいえる腕を、一部の選ばれた究極のガチハンター達は備える。その領域こそが、夢と浪漫。

人は、彼らをこう呼ぶ…。

究極のガチ好きハンター

……と。

廃人2

主人公・遠藤一樹は高校二年生。

部活はしない。何故か？答えは簡単。

「モンスターハンターをプレイ出来る時間が減る。」

彼の生活は、モンスターハンターが中心となっている。学校ではPSPを持ち込み、休み時間はもちろん、授業中まで隠れてプレイする筋金入り。何故そこまでやり込むのか？遠藤は、モンスターハンターを生き甲斐としている、いわばプロハン。神懸かり的な腕を持つ彼は、クラスでも一部のゲーマーから尊敬される存在。だが、彼は徒党を組まない。（PTプレイ）自分とモンスターの間に、余計な邪魔者が入ると、集中力を欠き、狩りに大きな支障をきたす。彼が徒党を組む時は、武器ごとに適した部位のみを攻撃するPT、いわば、役割が初めから決まっている統率がとれたPTでしか、彼は狩らない。はつきりいつてしまえば、遠藤は自分が認めた人間としか、狩りには行かない。そんじょそこらの下手くそハンターとは、絶対に狩りに同行しない。自分と同じ感覚を持つ共感者、装備自由の究極のガチ好きハンターのみで構成されたPT以外は、ほとんどソロプレイの遠藤。彼の考え、プレイスタイルに共感できる人間は少ないと思う。それだけ、彼は変人と言う名の廃人なのだ。↑意味不明

彼が一番やり込んでいるのはフロンティア。拠点は求人区としている。彼は、募集文をいつもこう書く。

装備自由・ガチ

この募集文を見て、ガチ好きハンターの魂の聖域ともいえる酒場に

侵入してくる人間は、二種類いる。

一つは、大勘違いの低ランクハンター。スキル構成が雑で、とてもじゃないが戦力になりそうにないハンター。装備自由なんだから、なんでもいいだろ！……と、思う人間もいるだろう……。野良なら、その考えは正しい。遠藤もそう感じている。だが、ここは求人区！野良とは違う、地下に聳える別世界！効率という名の絶対神が支配する、魔物の巣窟！

もう一つの人間は、言わずと知れた、究極のガチ好きハンター。侵入してきた瞬間に、同じ匂いを感じる同調。そして、彼らは呼応する。魂のユニゾン。

そして、狩りが始まれば、モンスターは思い知る事になる。究極のガチ好きハンターの凄さを……。

回避行動には、一瞬だけ無敵時間が存在する。その無敵時間を伸ばすスキルが、回避性能。回避性能があれば、モンスターの攻撃を避ける事は容易だ。だが、究極のガチ好きハンター達は、性能ナシで避ける。長年やり込んできた腕は伊達じゃない。コンマ何秒のタイミングを、モンスターの攻撃に合わせ、避けまくる！そんな馬鹿な……。と、思う人間もいるだろう。だが、回避行動の一瞬だけ微笑む女神と対話をすれば、不可能じゃない。一般人には理解できない、神の領域が、確かにそこに存在するのだから……。

狩りがおわったら、彼らは何も話さない。普通は、一言挨拶をするのだが、彼らはしない。……わかっているのだ。狩りを通じて、互いの意思疎通が完全に出来ているから、挨拶など不要。それが、究極のガチ好きハンターの任侠である……。

プロローグ終了

清水美砂

ピピピピピピ……。

安眠を妨害するかの如く、大音量で遠藤の部屋に鳴り響く目覚まし時計。時刻は7時きっかり。夜中の3時30分まで、モンスターハンターをプレイしていた為、睡眠時間はたったの3時間程だ。

「……ふあゝ、マジ眠い。」

それはそうだろう。眠いのは自業自得。全て自分が悪い。

「古龍種の剛翼がでないせいだな。そのせいで、俺は寝不足だ……。」

ぶつぶつとぼやきながら、洗面所に向かう遠藤。顔を洗い、歯を磨きながら用をたす。遠藤は、朝ごはんを食べない。朝はどうしても、食欲が沸かないのだ。歯を磨き終わったら、部屋に戻り、教科書をかばんに詰め込む。

「学校とか面倒だなゝ。ずっつとモンハンしてたいんですけど。」

自堕落。今の彼には、ピッタリの言葉だろう。もちろん、PSPも忘れずに、かばんに入れる。

「……行ってきます。」

玄関からゆつくりと外に出て、毎日同じ通学路を、まるで作業のようにな復する。つまらない毎日。自分の生きる場所は、あの世界……。そう、モンスターハンターをしていない自分は、死んでも同

然だ。

キキキキキキッ！

「……………あ？なんだ！？」

ドカツ！

後ろから来た自転車に、遠藤は……………轢かれた。前傾姿勢のまま、軽く空中に浮かび上がり、そのまま頭から地面に激突する。

「ちよつとおゝ、大丈夫！？」

自転車の持ち主は、慌てながら遠藤に近寄る。大丈夫な訳ねーだろ！と、思いつつ自分を轢いた人間の方に振り返る。

「……………！！！」

絶句。

「大変！頭から血が出てるよ！？」

いい匂いが遠藤の鼻をくすぐる。例えようのない、女の子独特の、魔法のような気持ちがいい匂い。遠藤は言葉を失う。何故か？理由は簡単。

「……………かわいい。」

「え？へっ？君、大丈夫！？」

あえて、細かな説明は抜かす。遠藤の前にいる彼女は、文句のつけようがない、まさに絶世の美女がそこにいた。

（読者の想像にお任せします。自分のモロ好みの女の子が、そこにいると思うてください。）

「……あつ、だつ、大丈夫……です。」

「本当に！？あつ、これで頭の血拭いてね。」

そう言つて手渡されたのは、キティーちゃんがプリントされた、かわいらしいハンカチだった。それを、遠藤は黙って受け取る。

「じゃっ、私急いでるからっ！」

行ってしまった……。可愛かったな……。同じ学校の制服を着てたけど……。あんな女の子うちの学校にいたっけ？なんて事を考えながら、手渡されたハンカチを見つめてみる。

「……清水美砂？」

ハンカチの隅っこに、名前が書かれているのを発見する遠藤。そこには、赤い文字で清水美砂と書かれていた……。

「…………マジ可愛かった♪」

清水美砂 2

カチカチカチカチカチカチカチカチ……。

「……………あつ!？」

力尽きました。PSPの画面に、モンスターの攻撃を受けて、崩れ落ちるハンターの姿が、遠藤の瞳にうつる。

「……………えっ!？」

力尽きました。報酬が減りました。再び、崩れ落ちるハンター。俗にいう、二死。または、二乙。

「……………嘘だろ？」

力尽きました。これ以上復活できません。

クエスト失敗……。

イビルジョー相手に、三死……。いつもなら、10分もあれば余裕で倒せるモンスター!。だが、今日は30分以上かかっても倒せず、揚げ句の果てに三死……。

原因は、自分でもわかっていた。今朝出会った女の子、清水美砂の顔が、クエスト中に、つねに頭を過ぎり、狩りに集中できないからだ。

(……………可愛かったな。)

「おい、遠藤!」

「はあ…？」

「はあ。じゃねえ！お前、この問題解けるか？」

担任の先生が、遠藤を指差し、黒板に書いてある問題を解くよう、命令に近い形で遠藤に話しかける。

「わかりません、解けません、理解できません。」

遠藤の態度に、腹を立てた教師！顔を真っ赤にしながら、怒声を放つ。

「馬鹿野郎！授業が終わるまで、廊下に立ってろ！」

～放課後～

「あゝあ、今日は散々な一日だったな…。」

手に持つはPSP。放課後になれば、だいたい人間は、教室から出て行く。このまま、おめおめとクエストに失敗したまま、家路につくなど、遠藤のプライドが許さない。誰もいない教室で、遠藤の無駄に熱いリベンジを始めようとしたその時、廊下に人間が通り掛かる。その人間は、二人。その内の一人は、今朝出会った女の子、清水美砂だった…。

（あ！？清水さん…。……隣にいる男は彼氏か？やたらイケてるメンズだけど…。なんか、気になるな～。）

ガタタツ！

勢いよく席から立ち上がり、二人の後をつける遠藤。ストーカーまがいの行為であるが、そんな事は重々承知。自然と体が動き出し、隠れながら二人の後をつける！

（……物置に入って行ったぞ？こんな人気の無いところで、一体何をするつもりだ？……まさか！……気になるな。）

ドアに耳を張り付け、中から聞こえてくる会話に耳をすませる遠藤。もはや、変態的なストーカーと、なんら変わりはない…。

「清水……俺と、付き合ってくれないか？」

（…んげげ！？マジかよ？イケてるメンズめ！）

「はい、コレ。」

「……PSPが、どうかしたの？」

（ん？会話から察するに、清水さんはPSPをイケてるメンズに渡したようだ…。）

遠藤の予想通り、清水美砂は男にPSPを手渡す。突然の出来事に戸惑う男。そんな男に、追い撃ちをかけるよう、清水美砂は話しかける。

「私より、モンスターハンターが下手な男とは付き合えないわ！貴方の腕を、確認させて。」

「うつ、腕？」

「3rdよ。アオアシラ討伐演習を、ソロクリアしてちょうだい。クリアータイムが、私の自己ベストより遅かったら、貴方とは付き合わない。」

（え？アオアシラ討伐演習？よりによって、一番難しい演習を…。確か、俺のソロ自己ベストは、7分07秒だったような…？）

アオアシラ討伐演習。武器の選択を間違えれば、ソロではクリアー不可能となってしまう。特に、ソロで挑む場合、ボウガンだけは選んではいけない。何故か？答えは簡単。弾切れするから。持ち弾では、いくら弱点部位に撃ち込んでも、絶対に弾切れを起こし、討伐タイムが必然的に遅れてしまう。ここでの選択は、火力のある太刀か、起動力のある片手を選ぶのがベストだ。

「へっ、モンハン？それでも、結構上手いんだぜ！」

意気揚々と、モンスターハンターをプレイする男。だが、清水美砂はがっかりしたような表情を見せる。男のPSPの持ち方が、雑なのだ。やり手のプレイヤーは、PSPの持ち方が違う。いわゆる、モンハン持ち。清水美砂は、見抜いた。この男の腕の本質を。

「自己ベストは何分なんだ？」

「私の自己ベストは、6分51秒よ。」

清水美砂 3

（6分台だって！？馬鹿な…、俺よりモンスターハンターが上手いのか！？）

清水美砂の自己ベストは、遠藤のタイムを遥かに凌駕するものだった。当然、男は清水美砂の自己ベストは破れず、落胆の表情を見せる。男のクリアータイムは、11分08秒。これでは、お話しにならない。清水美砂は、男からPSPを素早く取り上げ、言い放つ。

「クソみたいなタイムね。下手くそ。さっさと失せな！」

すると、男は顔を真っ赤にして、拳を震わせながら清水美砂に言い返す。清水美砂の言葉に腹を立てたのだろう。

「いい気になりやがって！こっちが大人しくしていれば、何様のつもりだ！」

男は清水美砂につかみ掛かるが、瞬時に腕を払われ、男の股間におもいつき蹴りを入れる清水美砂。男は情けない声で悲鳴をあげ、前かがみに倒れ込む。一体何が！？と、遠藤が外でハラハラしていると、何食わぬ顔で、清水美砂が倉庫から出てきた。

「あら？貴方は今朝の……」

いたってフレンドリーに話しかけてくる清水美砂。だが、遠藤は身構える。睨みつけるは、清水美砂のPSP。まさに、その視線はガチハンター特有の、負けず嫌いの気合いのオーラ。そのオーラに、清水美砂は気付く。互いに、考えている事は同じ。コイツは、自分

と同種の人間！紛れも無い、究極のガチ好きハンター！肌で感じ合う、狩人のオーラ。彼らは、言葉を発しない。清水美砂は、無言でPSPを遠藤に差し出す。受け取った瞬間感じる、清水美砂のメッセージ！貴方に、私のタイムが破れるかしら？まさしく、己のプライドを賭けた挑戦状！対する遠藤は、殺気を漂わせ、PSPの画面を睨みつける。狩ってやる！ただ、速く！それだけの想いを、清水美砂にぶつける遠藤！遠藤は、PSPを起動させる。その瞬間、狩り命を懸ける、廃人二人の死闘のゴングが鳴らされる。覚悟を決めた遠藤。多分、清水美砂という女は、自分より数段モンスターハンターが上手い筈。格上の相手の視線を、ビリビリと肌で感じ、それがプレッシャーとなり、重圧で押し潰されそうになる。あまりの重圧に、PSPを持つ両手が震える遠藤。これほどの相手、いや、化け物が存在したのか！？……上等だ、やってやる！清水美砂の重圧をかるうじて跳ね退け、武器セレクトに移行する。

（セオリー通りで行くなら、太刀か笛。片手でもいいけど……、求められるモノは火力！）

遠藤が選んだ装備は、太刀。START BUTTONを押して、準備完了。この瞬間、遠藤と清水美砂の長きにわたる闘いの第一歩が、幕を開けた。

死亡遊戲・アオアシラ

狩場という名の、戦場に舞い降りる遠藤。討伐演習なので、フィールドは大闘技所。対峙する相手は、言わずと知れた、青い巨熊アオアシラ。画面に映るハンターは自分自身！完全に、モンスターハンターの世界に入り込んだ遠藤。今回の相棒は、太刀。どんなクエストでも、最速タイムを目指すなら、必ずミスはしてはいけない。モンスターの攻撃に当たり、吹き飛ばされる。これだけで、かなりのロスタイムだ。それが何十回と重なれば、必然的にクリアタイムが遅くなる。ミスをしない。これが、まず第一だ。

ベースキャンプから、アオアシラが待ち構えるエリアに、スティックを動かし、ダッシュで移動。無駄は許されない。呼吸を調べ、神経を極限まで張り詰め、アオアシラまで一直線に向かう遠藤^{ハンター}！テリトリーに侵入して来た遠藤に対して、立ち上がり、威嚇行動を行うアオアシラ。的確に弱点部位を攻撃する為、アオアシラの背後に回り込み、抜刀切りからの連携で素早く鬼神ゲージを溜める。瞬間、勝利の女神が遠藤に微笑んだ！続けて威嚇行動を二度行うアオアシラ。そう、俗に言う、神モンスター。その神モンスターを一発で引き当てた遠藤に、清水美砂は遠藤の運の強さに驚愕する。

(……………コイツツツ！)

遠藤の攻撃は止まらない。太刀特有の、通常攻撃の無限ループで鬼神ゲージを即座に溜る。ここで、アオアシラが背後で攻撃を重ねる遠藤に対して、腕を薙ぎ払うように動かし、振り向き様の引っかけを繰り出す。予備動作を確認した遠藤は、スティックを右に倒しながら、無限ループからの切り下がり、反時計回りで上手く立ち回る。すると、再び威嚇行動を行うアオアシラ。そう、怒り状態への移行。だが、チャンスとばかりにRボタンを連打する遠藤。鬼神切

りオンリーで、アオアシラを切りつけ、仕上げの大回転切りを繰り出し、鬼神ゲージをワンランクアップさせる。この演習のポイント
は、いかに速く鬼神ゲージを最大の赤ゲージにするかがポイント。
そのため、序盤での鬼神&通常攻撃を織り交ぜたコンボは封印し、
鬼神ゲージをアップさせる事だけに集中する。すると、ゴロゴロと
アオアシラが転がり、もがくような姿勢になる。大チャンス！ダウ
ンだ。ここぞとばかりに攻める遠藤。鬼神切りと通常攻撃を織り交
ぜた攻撃を繰り出し、再び大回転切り。鬼神ゲージがワンランクア
ップして、そのまま睡眠ナイフを使用。アオアシラが睡眠状態にな
った隙を付いて、砥石を使い、切れ味を回復させる。ここまでは完
壁な運び。だが、気を抜いてはならない。小細工が通用しなくなっ
た後半からこそが、本当の腕の見せ所。鬼神切りと通常攻撃のコン
ボを、睡眠状態のアオアシラに叩き込み、鬼神ゲージを最大に昇華
させる。攻撃エフェクトが大きくなり、威力も数段跳ね上がる。
人気のない、学校裏の倉庫前で響き渡る、闘いの波動音。清水美砂
は、遠藤のプレイを見せつけられ、少し焦りはじめていた。こんな
奴が、今のご時世にいたのか！？ハメや装備指定、効率が求められ
るこの世界に、高々と美しく咲き誇る、孤高の華！まさしく、それ
は遠藤に相応しい。

(……………魅せるねえ。だけど、いつまでその集中力が続くかな？)

清水美砂は不敵に笑う。彼女は、わかっているからだ。遠藤が、自
分のタイムを破れない事に。そして、清水美砂の恐ろしさを、遠藤
は身をもって味わう事となる……………。

死亡遊戲・アオアシラ2

(……) ここまでの流れは完璧だ。このままいけば、6分台が出るか
っ!?)

力チ力チ力チ力チ力チ力チ力チ力チ力チ力チ
!!

PSPを高速で操る遠藤！その姿は、知らない人間が見れば、ただゲームに熱中する高校生。だが、その闘気・オーラを肌で感じ取れる、一握りの人間が見れば、ある人間は恐れ、ある人間は震え上がり、また、ある人間は共感し、賛辞を贈る。PSPの上で軽やかに動く両指は、まるでワルツにあわせて華麗に、そして流麗に踊っているようにすら見えてしまう。そう、ハンターズハイに突入したのである。俗にいう、ゾーンの領域に、遠藤は足を踏み入れた。読める。モンスターの攻撃が、完全に見切れ、かわせるのだ。究極のガチ好きハンターは、特異な人間ともいつても、過言ではない。一種の、New Typeとも呼べる人種だろう。またの名を廃人。神プレイヤーとも呼べる。まさに、遠藤はその中の一人。清水美砂も、同じ事が言えるであろう。

(…………立ち回り、アイテム使用のタイミング、運の強さ、そして、ハンターズハイの領域に侵入できる。……ふふふつ、イイ！イイよ遠藤君？君みたいな人を、私は探していた！そんなに強いオーラを見ちゃうと、つい潰したくなるのよね♪)

重圧が、さらに増した！？清水さんから放たれるオーラが、尋常じゃない！これは、殺気か？）

全身から、一斉に汗が噴き出てきた。原因は、清水美砂の視線・重圧・オーラが、まるで遠藤の身体をエグるように襲い掛かってきたからだ。間違いない。断言できる。この清水美砂という人間は、人の域を超えた、化け物！だが、恐怖を振り払うかの如く、遠藤はアオアシラに攻撃を加え続ける。闘っている相手は、アオアシラではない。清水美砂でもない。では、何と闘っているのか？それは、時間。清水美砂の重圧がいくら強くても、所詮、それはゲーム外の出来事。遠藤は、ラストスパートをかける！そして、ついにその時は来た。アオアシラが大地に崩れ落ち、ファンファーレが鳴り響き、討伐に成功した事を告げる。緊張の糸が切れ、それと同時に、オーラが消え失せる。すっかり憔悴しきる遠藤。持てる力は、全て出し切った。あとは、クエストクリア表示を待つだけである。

「……………遠藤君、だっけ？」

「……………ハアツ、ハアツ、…そうだけど？」

遠藤・クリアタイム
6分53秒！

（負けたツツツ！！！）

遠藤のクリアタイムは、清水美砂の自己ベストより、2秒遅い、6分53秒。2秒の壁。その壁は、エベレストの如くそびえ立つ、絶天の壁。たかが2秒、されど2秒。この2秒の差は、とてつもなく大きい。肩を落とし、ガツクリとうなだれる遠藤。

「君みたいな人間、久しぶりにみたよ。私ね、モンスターハンターが上手い男は、好きよ？」

「……………ああ、そう。そうだ、今朝のハンカチ……………」

「あつ、朝はごめんなさいね。」

「……………やめた。」

「えっ？」

「このハンカチを返す時は、あんたを完全に打ち負かした時に返すよ。そして、その時がきたら……………、俺と付き合ってください。今朝、一目惚れしてしまいました。」

突然の告白…と、いうよりは、挑戦状！それに対して、清水美砂の返事は…………

「上等じゃない！やれるものなら、やってごらん？」

この瞬間、遠藤の命を懸けた、廃人二人の恋愛バトルが、始まった。はたして遠藤は、怪物清水美砂を、モンスターハンターで打ち負かす事が出来るのか！？

モンハンはおもしろい！

（上等じゃない！やれるものなら、ヤッてみな！………か。）

帰宅して、パソコンを起動する遠藤。先程の清水美砂の言葉を思い出しながら、フロンティアのアイコンをクリックして、ランチャーにIDとパスワードを打ち込む。

（40分前）

「あなたの得意なタイトルは何？それに合わせて、勝負してあげる。」

絶対的自信。遠藤は、この言葉で全てを理解した。清水美砂という化け物は、全シリーズを完全に網羅している。ならば、余計な考えは無用。自分の一番やり込んでいるタイトルを選択するのが無難だろう。

「2ndGと、フロンティア。」

その言葉を聞いた清水美砂は、微笑して遠藤を軽く睨みつける。

「2ndG・フロンティア………ふふふつ、ホンツと、あなたとは気が合うわね。悪いけど、負ける気がしないわ。」

内心舌を巻く遠藤。おそらく清水美砂も、この二つのタイトルが得意なのだろう。

・2ndG

2ndの続編となったタイトル。上位の上、G級クエストが解禁。

さらに、新モンスター・亜種が追加され、爆発的にヒットした。やりこみ要素満載の、名作と言っても過言ではない。

・MHF

2（ドス）をベースに、新要素を追加された、オンライン専用タイトル。フロンティアオリジナルモンスター&武具がとっても魅力的。オンラインならではのイベントも開催され、楽しさ満載。しかし、あまりのマゾさに、引退する人間が続出。

「サーバーは何鯖？」

「……………1。」

「私も1よ。ふふつ、学校では2ndG。家ではフロンティアで勝負しよう。それでいいよね？」

「……………ああ、構わないよ。」

遠藤は、ただたんに、清水美砂がかわいいから付き合いたい訳ではない。いや、確かにかわいいし、自分の好みでもある。異性として惹かれるのは、ごく当然の事かも知れない。だが、それ以上に、あの怪物を打ち負かしてみたいという気持ちが遥かに強かった。圧倒的なタイムでアオアシラを撃伏せ、放つオーラが闘気を超えて、殺気となり相手にプレッシャーを与える…。もはや、人の域を超越した、超弩級の怪物！今まで見て来たどのハンターよりも、明らかに強い。だからこそ、闘志が沸く。

(……………確か、オムレッツ魔神とか言ってたな。)

オムレッツ魔神。それが、清水美砂のハンターネームだ。区域を選択して、とりあえず適当なランドにINする遠藤。

「今回使用する、遠藤君の装備編Part1」

・F2の情報データです。

武器 炎妃双【悪女】

頭 ヴォルアポカリプス

胴 ゴゴFX

腕 竜巻F

腰 ルコFX

脚 ベルFX

全てLV7

装飾

・剛力×9個

・音無G

・防音珠

・研磨珠×3

カフ

・研ぎ師PB1

発動スキル

・攻撃UP【大】

・見切り+3

・業物+2

・高級耳栓

・火事場力+2

・耐震+1

・切れ味レベル+1

- ・回避性能+1
- ・砥石使用高速化
- ・ランナー

防御力

744

耐性

火 10

水 5

雷 10

龍 1

氷 -2

メニューを開き、コミュニケーションを選択。メンバー検索で、オムレツ魔神を検索すると、一件表示される。おそらく、これが清水美砂だろう。どうやら、キャラバン区域のモデストランド1にいるようだ。モデストということは、どうやら大討伐中の様子…。仕方ないので、FREEDOMの。部屋を開き、暇を潰す遠藤。

・大討伐

最大8〜16人まで挑めるクエスト。狂暴期の場合は24〜32人出現モンスターは、ラオシャンロン約10倍以上大きい。

・FREEDOMの。部屋

MHFの超便利サイト。作者御用達のサイトです。

（進化武器を担ぐのかな？あの怪物の事だ、装備もぶっとんでるんだろうな…。）

槍武器使い・清水美砂

貢献P1600000

画面に表情されたりザルトを見て、清水美砂はほくそ笑む。これで、3つ目の進化武器が、LV100に到達したからだ。

ガンランス

絢爛・煌然・燦然

全てLV100

これで、ラビイの顔を見なくて済む。ここまでくるのに、半年かかった…。と、言う事は、約2ヶ月で一つの進化武器をLV100にして派生させ、派生した武器を再びLV100にした事になる。

ガンランスは最強の武器と、清水美砂は豪語する。肉質無視の固定ダメージを与える砲撃に、爽快・痛快とも言える竜撃砲。面白さ満載のガンランスは、少々クセがあり、お世辞にも扱いやすい武器とは言えないだろう。ぶっちゃけてしまえば、あまり強くない。どちらかと言えば、生き抜きに使って楽しむ武器として、扱われる事が多い。(ガンス使いのハンターさん、ごめんなさい。)しかし、その道を極める人間・究極のガンランス使いが扱えば、恐ろしい姿の武器に変貌する。浪漫・無限の可能性。そんな言葉は聞き飽きた。清水美砂は、究極のガチ槍使い。だからこそ、その言葉に怒りを覚える。浪漫？無限？馬鹿言うな！ガンランスは、無敵の要塞兵器。ガチ使い最後の砦にして、最終兵器。それが、ガンランス！SRを取得すれば、もはや手がつけられない、凶悪な銃槍…いや、獣槍に変化する。獣の咆哮の如く、槍の先端から噴き出すヒートブレード。会心率100%という並外れた効果を持つ反面、デメリットも存在する。ヒートブレード終了後、切れ味が最低まで落ち込み、複数回研がなければならない。それが、天ノ型の弱点だろう。砥石使用高速化は、必須スキルともいえる。だが、清水美砂はその特性をえら

く気に入っている。強力な力を獲ようとすれば、代償に何かを失う。これは、ごく当たり前の事だろう。と、清水美砂は感じているのだ。

「……………個チャ？あつ、遠藤君だ〜」

会話ログに、オレンジ色の文字で表示される遠藤からのメッセージ。

勝負しろ。

一言。たったの一言！無駄な文字で、文章を飾り付ける必要はない。その一言に、清水美砂は、こう返事を返す。

@here

（クックク……………イヤンクックク、なんちゃって♪遠藤君かあ〜、普通に会えたら、きつといい友達になれたろうに…。けど、普通になんて無理だよね？だって、私達は……………）

遠藤が、清水美砂のジャンプで、この場に舞い降りた。すでに、キラクターから闘気が放たれ、清水美砂を威圧するように感じられる。

（神に選ばれた、究極のガチ好きハンター！だから、馴れ合うなんてできないのよっ！）

画面を埋め尽くす程に、清水美砂は遠藤に殺気を放つ。遠藤の闘気と、清水美砂の殺気が絡み合い、メゼポルタを不穏な空気が包み込む。

通信エラー

他のハンターや、放置していたキャラクターが、一斉に落ち始める。メゼポルタ広場には、2人のハンターのみが生き残る。廃人・遠藤と、怪物・清水美砂だ。二人の尋常ではないオーラの影響で、周囲のハンター達に一斉に起きた怪現象。通信エラーの雨嵐！（この物語はフィクションです。実際にはありません。）もはや、言葉は不要。遠藤のリベンジと、プライドを賭けた魂の一戦が今、幕を開ける！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8869w/>

ゲーム廃人・THE・レジェンド

2011年11月10日12時59分発行